

# 17～18 世紀ノイヴィートにおける 宗派複数性

—— 近世ヨーロッパにおける法、実践に基づく宗教的寛容 ——

永 本 哲 也

## 1. はじめに

### 1.1 近世の神聖ローマ帝国における宗派複数性

近世は、ヨーロッパのキリスト教の状況が大きく変化していく時代であった。16 世紀には自ら聖書を読み、カトリック教会とは異なる教えや信仰実践のあり方を理想とする無数の人々が現れた。その中から、新たな宗派・集団が次々と生まれた。ルター派や改革派はカトリック教会から分離し、再洗礼派諸派や心霊主義者、反三位一致論者などは、世俗権力から公認されないマイノリティとして生き残りを模索した。こうして、ヨーロッパのキリスト教教会は分裂した。

神聖ローマ帝国でカトリックと並びルター派が公認された 16 世紀半ば以降、帝国の各領邦や都市で「宗派化 Konfessionalisierung」が試みられた。「宗派化」とは、国家や教会が自分たちの支配領域で公認宗派の教義や典礼、価値観、生活様式を浸透させ、宗派的統一性を確立させようとする動きを指す歴史学概念である<sup>1)</sup>。

しかし、実際には多くの領邦や都市では宗派化が十分進まなかった。改宗や

---

1) 宗派化論の概要については以下を参照。踊共二「宗派化論——ヨーロッパ近世史のキーコンセプト」『武蔵大学人文学会雑誌』第 42 巻第 3・4 号、2011 年、221–270 頁；踊共二「宗派化と世俗化の歴史解釈——ヨーロッパ史からグローバルヒストリーへ」『東欧史研究』40、2018 年、1–12 頁；Heinrich Richard Schmidt, *Konfessionalisierung im 16. Jahrhundert*, München 1992.

亡命を行う者が出たり、公認宗派以外の住民が居住していたり、場所によっては複数宗派が公認されていたためである。複数宗派が併存し、それぞれの宗派の形成・確立が行われた「多宗派化 Multikonfessionalisierung」された場所では、当然のことながら単一宗派による宗派化を貫徹することはできなかった<sup>2)</sup>。

エティエンヌ・フランソワは、ヨーロッパでは特定の宗派が支配的で、宗派と国民のアイデンティティが密接に結びついている国が多いが、スイスやオランダ、ハンガリーそしてドイツはこれに当てはまらないとしている。そして、ドイツでは、特に 1648 年以降「宗派複数性 Konfessioneller Pluralismus」が定着したと指摘した<sup>3)</sup>。

フワンソワによれば、この宗派複数性は、神聖ローマ帝国では先ず「事実上の複数性 *de-facto*-Pluralismus」として実現した<sup>4)</sup>。たとえ単一の宗派しか公認されていない領邦や都市であっても、多くの場合それ以外の宗派の信徒も居住していた。その中には、再洗礼派のような帝国全土で禁じられていた少数派やユダヤ人という異教徒も含まれた<sup>5)</sup>。

他方で、帝国では「法による複数性 *de-jure*-Pluralismus」も成り立っていた<sup>6)</sup>。1555 年のアウクスブルクの宗教平和では、カトリック以外にルター派も公認

2) 踊共二「宗派化論」257 頁；踊共二「宗派化と世俗化の歴史解釈」4-5 頁；鍵和田賢「近世都市ケルンのプロテスタント共同体——ヴェストファーレン講和会議期の宗派間交渉の考察——」『史学雑誌』第 121 編第 8 号、2012 年、2 頁。

3) Etienne François, Konfessioneller Pluralismus und deutsche Identität, in: Stefan Ehrenpreis, Ute Lotz-Heumann, Olaf Mörke und Luise Schorn-Schütte (Hg.), *Wege der Neuzeit: Festschrift für Heinz Schilling zum 65. Geburtstag*, Berlin 2007, S. 285-309. 「宗派複数性」という訳語については、鍵和田賢「近世都市ケルンのプロテスタント共同体」25 頁を参照。

4) François 2007, S. 288.

5) 近世帝国での再洗礼派については以下を参照。永本哲也「近世から近代を生き抜くメノー派 プロイセン、ドイツ、ロシア」永本哲也、猪刈由紀、早川朝子、山本大丙編『旅する教会 再洗礼派と宗教改革』新教出版社、2017 年、190-191 頁。近世帝国のユダヤ人については以下を参照。踊共二「近世ドイツの反ユダヤ主義と親ユダヤ主義——交錯する宗教と政治——」甚野尚志、踊共二編著『中近世ヨーロッパの宗教と政治——キリスト教世界の統一性と多元性——』ミネルヴァ書房、2014 年、390-409 頁；踊共二「近世ドイツ農村のユダヤ人 被差別民か隣人か」関哲行、踊共二『忘れられたマイノリティ 迫害と共生のヨーロッパ史』山川出版社、2016 年、138-162 頁。

6) François 2007, S. 288.

されたし、1648 年のヴェストファーレン条約では改革派もそこに加わった<sup>7)</sup>。アウクスブルクなど一部の都市、ブランデンブルク選帝侯領のような一部の領邦は、複数宗派を公認していた<sup>8)</sup>。ただし、カトリック、ルター派、改革派以外の宗派は、帝国で認められていなかった。

複数宗派が併存していた場所では、必然的に異なった宗派に属する住民が、日常的に接することになった。宗派間の違いは様々な争いを引き起こす契機となったが、他方では人々は争いを避け、秩序を維持するために、他宗派の住民と折り合いをつけていくことを学んでいった。近年宗派複数性の中を生きる人々が行った日々の実践の中で、複数宗派の共存や宗教的寛容が育まれてきたことに注目が集まってきている<sup>9)</sup>。そのため、近世社会における宗教的寛容を

7) アウクスブルクの宗教平和については以下を参照。永田諒一『「アウクスブルクの宗教平和」とその体制』永田諒一『ドイツ近世の社会と教会——宗教改革と信仰派対立の時代——』ミネルヴァ書房、2000 年、121-175 頁。ヴェストファーレン条約については以下を参照。山本文彦「1648 年ヴェストファーレン条約に関する一試論——オスナブリュック条約の解釈とその歴史的意義をめぐって——」『北海道大学文学研究科紀要』139、2013 年、135-168 頁。

8) François 2007, S. 291.

9) 近世を通じての宗派間関係を網羅的に叙述した研究が、Benjamin J. Kaplan, *Divided by Faith. Religious Conflict and the Practice of Toleration in Early Modern Europe*, Cambridge/London, 2007. 他にも、C. Scott Dixon, Dagmar Freist and Mark Greengrass (eds.), *Living with Religious Diversity in Early-Modern Europe*, Farnham, 2009; Thomas Max Safley (ed.), *A Companion to Multiconfessionalism in the Early Modern World*, Leiden/Boston 2011; Katsumi Fukasawa, Benjamin J. Kaplan and Pierre-Yves Beaurepaire (eds.), *Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World. Coexistence and Dialogue from the Twelfth to the Twentieth Centuries*, Abington, 2017 など、この問題を扱う論文集が近年次々と刊行されている。日本でも、宗派間関係の実態を明らかにする研究が次々と刊行されている。永田諒一『ドイツ近世の社会と教会』; 永田諒一『宗教改革の真実 カトリックとプロテスタントの社会史』講談社現代新書、2004 年; 踊共二『改宗と亡命の社会史——近世スイスにおける国家・共同体・個人——』創文社、2003 年; 関哲行、踊共二『忘れられたマイノリティ』; 鍵和田賢「近世都市ケルンのプロテスタント共同体」; 鍵和田賢「信仰のために「国境」を越える——近世都市ケルンにおける改革派プロテスタントの「越境典礼」——」『史潮』新 82、2017 年 12 月、24-45 頁; 安平弦司「宗派間関係と寛容の機能——1670 年代ユトレヒトにおける信仰実践をめぐる闘争——」『史林』98 巻 2 号、2015 年、1-35 頁; Genji Yasuhira, *Confessional Coexistence and Perceptions of the 'Public': Catholics' Agency in Negotiations on Poverty and Charity in Utrecht, 1620s-1670s*, in: *Low Countries Historical Review* 132(4), 2017, pp. 3-24. 宗教的寛容を扱う論文集も複数刊行されている。深沢克己、高山博編『信仰と他者 寛容と不寛容のヨーロッパ社会文化史』東京大学出版会、2006 年; 深沢克己編『ユーラシア諸宗教の関係史論 他者の受容、他者の排除』勉誠出版、2010 年; 浅見雅一、野々瀬浩司編『キリスト教と寛容 中近世の日本とヨーロッパ』慶應義塾大学出版会、2019 年。

考える際には、法による宗派複数性だけでなく、日常生活の中で育まれた実践も考慮に入れることが必要となる。

## 1.2 ノイヴィートにおける宗教的寛容

本稿では、近世における宗派複数性のあり方の一端を、神聖ローマ帝国の都市ノイヴィート（Neuwied）を例に明らかにしようと試みる。ノイヴィートは、ヴィート伯が17世紀半ばにライン川中流域に建造し、18世紀には市内に7つの宗教集団が共存していた領邦都市であった。ノイヴィートは18世紀末には宗教的自由や寛容が花開いた都市として啓蒙主義者から称賛されていたが、ノイヴィート市が2009年に『生きた信仰多様性 Gelebte Glaubensvielfalt』という書籍を刊行したように、異なった信仰を持つ人々が共存してきた歴史は、現在でもノイヴィート市民のアイデンティティにとって重要なものであり続けている<sup>10)</sup>。

ノイヴィートの歴史については、ヨハン・ステファン・レックの著作、ノイヴィート創立300年の1953年に市が編纂した論文集によって概観できる<sup>11)</sup>。後者は、市内に居住していた各宗教集団を扱った章も含んでいる<sup>12)</sup>。ノイヴィートの法的発展については、ハンス・ヴィルヘルム・ストゥップがボン大学に提出した未刊行の博士論文から知ることができる<sup>13)</sup>。ヴィート伯家については、

10) Stadt Neuwied (Hg.), *Gelebte Glaubensvielfalt. Am Beispiel der Stadt Neuwied*, Neuwied 2009.

11) Johann Stephan Reck, *Geschichte der gräflichen und fürstlichen Häuser Isenburg, Runkel, Wied, verbunden mit der Geschichte des Rheinthals zwischen Koblenz und Andernach, von Julius Cäsar bis auf die neueste Zeit*, Weimar 1825; Stadtverwaltung Neuwied (Hg.), *1653–1953, 300 Jahre Neuwied. Ein Stadt- und Heimatbuch*, Neuwied 1953.

12) 福音派（改革派、ルター派）、カトリック、ヘルンフォート兄弟団、メノー派、靈感派、ユダヤ人についてである。300 Jahre Neuwied, S. 365–394.

13) Hans Wilhelm Stupp, *Die rechtsgeschichtliche Entwicklung der Stadt Neuwied*, Dissertation. Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn, 1959. 本書は、ボン大学のInstitut für Geschichtswissenschaft, Abteilung für Geschichte der Frühen Neuzeit und Rheinische Landesgeschichteの図書館に所蔵されている。以下も参照。Karl-Hans Fischer, *Justitia in Neuwied. Die Entwicklung des Rechts- und Justizwesens in Neuwied*, Neuwied 2006.



ヴィルヘルム・トゥリウスによる小冊子が参考になる<sup>14)</sup>。ヴィート伯領の教会制度については、ローラント・シュルターの著書で概観できる<sup>15)</sup>。

ノイヴィートの宗教的寛容を扱った研究は、1980 年代からいくつか刊行されている。ヴァルター・グロスマンは、ノイヴィートにおけるメノー派、靈感派、ヘルンフト兄弟団に対する伯の寛容政策を、他の君主や都市の例を参照し、その中に位置づけながら明らかにした<sup>16)</sup>。ステファン・フォルクは、ヴィート伯の人口増加政策とノイヴィートでの宗教的寛容の関係を、都市建造時から 18 世紀末まで検証した<sup>17)</sup>。ヴェルナー・トロスバッハは、伯領の農民蜂起や都市の産業化を扱った著書の中で、市内の宗教状況にも触れている<sup>18)</sup>。ゲオルク・リュッツェンキルヒェンも、ノイヴィートの宗教的寛容を概観する論文を出版した<sup>19)</sup>。クリストフ・ネプゲンは旅行記を用いてノイヴィートを含む近世ライン地方の宗派状況を描いている<sup>20)</sup>。

それ以外に、市内の各宗教集団を扱った研究も出されている。カトリックについては、司祭 H. フォルクが出した小冊子<sup>21)</sup>、改革派とルター派に関しては牧師のルドルフ・レーアの手による小冊子<sup>22)</sup>、メノー派に関してはディルク・カ

14) Wilhelm Tullius, *Die wechselvolle Geschichte des Hauses Wied*, 2. Auflage, Neuwied 2003.

15) Roland Schlüter, *Calvinismus am Mittelrhein. Reformierte Kirchengemeinden in der Grafschaft Wied-Neuwied 1648–1806*, Köln/Weimar/Wien 2010.

16) Walter Grossmann, Städtisches Wachstum und religiöse Toleranzpolitik am Beispiel Neuwied, in: *Archiv für Kulturgeschichte* 62/63, 1980/81, S. 207–232.

17) Stefan Volk, Bevölkerung und religiöse Toleranz. Neuwied von der Mitte des 17. bis zur Mitte des 18. Jahrhunderts, in: *Rheinische Vierteljahresblätter* 55, 1991, S. 205–231.

18) Werner Troßbach, *Der Schatten der Aufklärung. Bauern, Bürger und Illuminaten in der Grafschaft Wied-Neuwied*, Fulda 1991.

19) H.-Georg Lützenkirchen, Neuwied. Vom Nutzen der Toleranz, in: Sabine Hering (Hg.), *Toleranz—Weisheit, Liebe oder Kompromiss? Multikulturelle Diskurse und Orte*, Opladen 2004, S. 111–128.

20) Christoph Nebgen, *Konfessionelle Differenzverfahren. Reiseberichte vom Rhein (1648–1815)*, München 2014.

21) H. Volk, *Beiträge zur Geschichte der katholischen Pfarrei Neuwied*, Neuwied/Linz a. Rhein 1922.

22) Rudolf Löhr, *Geschichte der Evangelischen Kirchengemeinde Neuwied*, Neuwied 1953.

テポール、ライナー・コーベ、永本哲也による論文がある<sup>23)</sup>。ヘルンフト兄弟団についてはヴィルフリート・シュトレームによる大著が、ユダヤ教徒についてはフランツ・レグネリーによる通史がそれぞれ刊行されている<sup>24)</sup>。

近世ノイヴィートに関する史料のほとんどは、ノイヴィートにあるヴィート侯文書館 (Fürstlich Wiedisches Archiv: FWA) に所蔵されている。筆者が2018年3月と9月に調査を行った際には、席数が限られているため利用に予約が必要であり、週一日水曜のみ開館していた。所蔵資料の概要は1911年に刊行されたカタログによって把握できるが<sup>25)</sup>、文書館内ではより詳しい手書きのカタログも閲覧可能である。一部の法令は J. J. スコッティ編纂の史料集で活字化されている<sup>26)</sup>。それ以外の宗教関連の史料は、前述の文献の中で一部刊行されているだけである。

本稿ではこれらの先行研究に則りながら、ノイヴィートの宗派複数性を、法

- 
- 23) Dirk Cattepoel, Die Neuwieder Mennonitengemeinde, in: Mennonitischen Geschichtsverein Weierhof (Hg.), *Beiträge zur Geschichte rheinischer Mennoniten. Festgabe zum 5. Deutschen Mennoniten-Tag vom 17. bis 19. Juli 1939 zu Krefeld*, 1939 S. 144–153; Rainer Kobe, Neuwieder Toleranz. Die Mennonitengemeinde in Neuwied im 17. und 18. Jahrhundert, in: *Jahrbuch für Evangelische Kirchengeschichte des Rheinlandes* 62, 2013, S. 107–118; 永本哲也「近世ヨーロッパを生き抜く宗教的マイノリティ再洗礼派——多宗派併存都市ノイヴィートのメノー派を中心に」浅見雅一、野々瀬浩司編『キリスト教と寛容——中近世の日本とヨーロッパ』慶應義塾大学出版会、2019年、187–202頁。
- 24) Wilfried Ströhm, *Die Herrnhuter Brüdergemeine im städtischen Gefüge von Neuwied. Eine Analyse ihrer sozialökonomischen Entwicklung*, Boppard am Rhein 1988; Franz Regnery, *Jüdische Gemeinde Neuwied. Geschichte in Bildern und Dokumenten. Zeichen und Zeugen von damals und heute. Verantwortung und Sühne als Auftrag für morgen*, Neuwied 1988.
- 25) Fürstliche Wiedische Rentkammer zu Neuwied (Hg.), *Fürstlich Wiedisches Archiv zu Neuwied. Urkundenregesten und Akteninventar*, Neuwied 1911.
- 26) J. J. Scotti (Hg.), *Sammlung der Gesetze und Verordnungen, welche in den vormaligen Wied-Neuwiedischen, Wied-Runkel'schen, Sayn-Altenkirchen'schen, Sayn-Hachenburg'schen, Solms-Braunfels'schen, Solms-Hohensolms-resp. Lich'schen, Nassau-Usingen'schen, Nassau-Weilburg'schen, Herzoglich Nassauischen und Wetzlar'schen (resp. fürstl. Primatischen, großherzogl. Frankfurt'schen etc) nunmehr königl. preußischen-Landes-Gebieten, über Gegenstände der Landeshoheit, Verfassung, Verwaltung u. Rechtspflege ergangen sind, von Eintrittszeitpunkt ihrer Wirksamkeit, bis zu jenem der königl. preußischen Gesetzgebung in den Jahren 1815 und 1816*, Düsseldorf 1836.

と実践という二つの観点から検証する。

## 2. フリードリヒ 3 世による寛容政策

### 2.1 宮廷都市ノイヴィートの建設

ヴィート伯フリードリヒ 3 世 (Friedrich III.; 1618–1698) が、新しい都市ノイヴィートを建造しようと考えたのは、三十年戦争によってヴィート伯領に甚大な被害が出たためであった。ヴィート伯は荒廃した彼の領地を経済的に復興させるために、1650 年 4 月 9 日にケルン大司教に対し、ケルンと “Neuen Wied” の間で関税なしに船舶が自由に通行できるよう求めるなど、ライン交易に参加しようと試みた<sup>27)</sup>。

こうして彼は、ライン川の沿岸に新たな宮廷と都市を建設した。彼が新都市を建造した場所は、三十年戦争で甚大な被害を受けた村ランゲンドルフ (Langendorf) であった。フリードリヒ 3 世は、1357 年に得たノルトホーフェン (Nordhofen) に都市を建設するための特権を基盤に、新都市建造の特権を皇帝フェルディナント 3 世から新たに獲得した。1653 年 8 月 26 日に出された特権によって、新都市ノイヴィートが建造されることとなった<sup>28)</sup>。

ただし、都市を建造してすぐに人口が増加したわけではなかった。その理由の一つは、この時期領内の農民が重税に対し抗議をし、伯と争っていたことにあった。この争いは 1662 年春まで続いたが、この時点で市内には 10 軒しかなく、しかもそれらの家のほとんどは伯の役人のものであった<sup>29)</sup>。

### 2.2 1662 年の特権

ノイヴィートへの移住を促す際に重要な意味を持ったのが、1662 年 6 月 7

---

27) Grossmann, S. 210; S. Volk, S. 208.

28) 条文は、Ewald Crusius, Die Gründung Neuwies, in: *300 Jahre Neuwied*, S. 48–50. 以下も参照。Grossmann, S. 210.

29) S. Volk, S. 208.

日にヴィート伯によって公布された特権である<sup>30)</sup>。9条から成るこの特権は、信仰に関わる条項を含んでいた。ヴィート伯領の公認宗派は改革派であったが、ノイヴィートの住民・移住者は、改革派でなくても、完全な良心の自由と家の中での宗教的行為を伯によって保障された。さらに、改革派以外の住民でも、下級裁判権と都市行政を引き受ける市当局の一員となることが許された。

差し当たりこの特権が適用されたのは、ヴェストファーレン平和条約によって帝国で公認されていたルター派、カトリックの住民に限られていた<sup>31)</sup>。しかし、この特権が、ノイヴィートにおける「法による宗派複数性」を支える基盤となった。

この市内での宗教的寛容を認める特権は、市外から宗教的亡命者を呼び込むために出されたものでもあった。近世の帝国には、ハンブルク、マンハイム、グリュックシュタットなど人口・経済力の増進のために宗教的亡命者を積極的に受け入れる「亡命者都市 Flüchtlingsstädte」が存在していた<sup>32)</sup>。ノイヴィートもその一つだと言える。移住者を募集するためにこの特権は印刷され、市外で広められることとなった<sup>33)</sup>。

### 2.3 メノー派への認可状

しかし、1662年にこの特権が出された時点で、帝国で公認されていた三宗派以外の住民が既に市内に住んでいた。まだほとんど伯の役人しか居住してい

30) 条文は、Scotti, S. 9–12. 以下も参照。Grossmann S. 211ff.; S. Volk, S. 208f.; Lützenkirchen, S. 115f. 良心の自由に関する条項は1条、市当局に関する条項は5条。

31) 1条で良心の自由と礼拝自由が認められるノイヴィートの住民には、「1648年のヴェストファーレン平和条約に応じて」という条件がついている。Scotti, S. 9. 以下も参照。Grossmann, S. 212; S. Volk, S. 209.

32) Heinz Schilling, *Die Stadt in der frühen Neuzeit*, 2. Auflage, München 2004, S. 68, 108f. 近世帝国での人口政策については以下を参照。Justus Nipperdey, *Die Erfindung der Bevölkerungspolitik. Staat, politische Theorie und Population in der Frühen Neuzeit*, Göttingen 2012.

33) S. Volk, S. 210.; Albert Meinhardt, Der Werdegang Neuwieds, in: *300 Jahre Neuwied*, S. 72. 本書ではアムステルダムで1667年に印刷されたオランダ語の特権の写真を見ることができる。

なかった 1659 年に、メノー派の信徒ミヒエル・センツェニヒ (Michel Sentzenich) が家を構えていたのである<sup>34)</sup>。

この最初期の住人の一人センツェニヒの属するメノー派は、16 世紀に生まれた再洗礼派の一派である。再洗礼派は、幼児洗礼の有効性を否定し、物心ついて教えを理解し、信仰を持った後に洗礼を行う人々である<sup>35)</sup>。カトリック、ルター派、改革派はいずれも幼児洗礼を行うため、再洗礼派は異端・反乱者としてヨーロッパ全土で迫害を受けた。神聖ローマ帝国においても、1529 年のシュバイヤー帝国議会の帝国最終決定で、幼児洗礼批判・再洗礼の実行は、死をもって禁じられた<sup>36)</sup>。再洗礼派には多様な分派があった。メノー派は、1530 年代に低地地方の再洗礼派の指導者になったメノー・シモンズ (Menno Simons) の流れを汲む宗派である。彼らは、プロイセンやドイツにも広がった<sup>37)</sup>。1663 年には既に市内にメノー派の小さな共同体ができていたが、この時期ノイヴィートに移住してきたのは、近隣のユーリヒ (Jülich) やモンシャウ地方 (Monschauer Land) で迫害、追放されたメノー派であった<sup>38)</sup>。

1662 年の特権は、ノイヴィートにおける「法による宗派複数性」を確立させたが、メノー派の帝国で公認されていない宗派の住民はそこから除外されていた。にもかかわらず、伯はメノー派の居住を明確に黙認していたことから、法的に認められた宗教集団の成員以外でもノイヴィートでは居住が実質的に許されていたことが分かる。

34) Kobe, S. 110.

35) 再洗礼派の概要については以下を参照。永本哲也他編『旅する教会』: John D. Roth and James M. Stayer (eds.), *A Companion to Anabaptism and Spiritualism, 1521-1700*, Leiden/Boston, 2007.

36) Gustav Bossert (Hg.), *Quellen zur Geschichte der Wiedertäufer. 1. Band Herzogtum Württemberg*, Leipzig 1930, Nachdruck, New York/London, 1971, S. 2-5; 永本哲也 2019 年、189 頁。

37) メノーとメノー派については以下を参照。永本哲也他編『旅する教会』78-95, 187-200 頁; 出村彰『再洗礼派』160-166 頁; Piet Visser, *Mennonite and Doopsgezinden in the Netherlands, 1535-1700*, in: Roth et. al. (eds.), *A Companion to Anabaptism and Spiritualism*, pp. 299-345.

38) Cattepoel, S. 144f.

このような市内でのメノー派の曖昧な法的地位を明確にしたのが、1680年12月16日にメノー派に対して出された認可状である<sup>39)</sup>。この認可状が出る前に、改革派のヴィート伯領の領邦教会が、メノー派に対し改革派の礼拝式への参加を要求していた。そのため、メノー派の家長たちが伯に対し礼拝式に参加しないで済むよう求めた。そこで伯は、メノー派に対し、改革派の礼拝式への参加を強制されることなく、良心の自由と家の中で教えを説くことを、将来にわたって保障する認可状を公布した。

ただし、伯が与えたメノー派に関する認可は、1529年に出された帝国法に反しているということで帝国最高法院から拒絶された<sup>40)</sup>。そのためフォルクは、この認可状は、帝国法に合致していない規定を伯自身の権威で承認したものであり、罰則もないため、メノー派の側からは告訴することができず、彼らの法的地位は依然として不安定だったと指摘している<sup>41)</sup>。この時期、帝国の他の都市や領邦でも、メノー派などの帝国で公認されていない宗派の居住が認められており、帝国法と都市や領邦の法的不一致はノイヴィートのみならず多くの場所で見られた<sup>42)</sup>。このように近世の帝国では、宗教的マイノリティの法的地位は不安定なものでしかありえなかった。

## 2.4 ルター派とカトリックの権利獲得のための交渉

1662年と1680年の認可状により、ノイヴィートでは非改革派信徒の信仰自由が法的に認められたが、彼らに許されたのはあくまで私的な宗教的行為に限られていた。しかし、1682年以降ルター派とカトリックの住民がより広範な

39) 条文は、Cattepoel, S. 152-153. 以下も参照。Kobe, S. 110; S. Volk, S. 211; 永本哲也 2019年、193-194頁。

40) Cattepoel, S. 153; Grossmann, S. 215f.

41) S. Volk, S. 212.

42) 帝国の他地域での少数派に対する特権付与については以下を参照。Grossmann, S. 217-222. こうした法的不一致が、帝国から問題視されることもあった。ハンブルク市参事会は、1672年に皇帝から市内の再洗礼派を追放せよと命じられた。しかし市参事会は、メノー派を擁護し追放を拒絶している。Michael D. Driedger, *Obedient Heretics. Mennonite Identities in Lutheran Hamburg and Altona during the Confessional Age*, Burlington, 2002, p. 3f.

信仰実践の自由を伯に求めた。

1671 年に改革派が、マルクトに自分たちの教会を建築し始めた。この教会は 1684 年に完成し、87 年に聖別された<sup>43)</sup>。他方 1682 年の春に、ルター派が、礼拝式を行うのに市民の家では手狭なので、適当な礼拝用の建物を建てることを伯に請願した<sup>44)</sup>。これに対し 9 月 28 日に伯は、教会と学校を建設する許可を出した<sup>45)</sup>。9 月 1 日に伯はカトリックに対しても、自分たちで費用を負担し教会と学校を建て、鐘を鳴らし、自分たちの司祭を任じることを許可した。ただし、信徒が 130 人まで増え、65 の家を建てるようになったらという条件付きであった。当時のノイヴィートには、全部で 50～60 の家しかなかったため、かなり長い時間をかけないと達成できない条件を出したと言える。さらにカトリックには、市内で宗派間の争いが起こらないように、教会の外で聖体顕示台、十字架、旗を示さず、行列を行わないことという制限をつけた<sup>46)</sup>。

この 1682 年の一連の動きは、ルター派とカトリックが、改革派同様の宗教的自由を得るための重要な一歩となった。ただし、1683 年にはヴィート伯領で教会規則が公布されており、ノイヴィートを含めた伯領全土において改革派が支配的宗派であるという原則が明示されている<sup>47)</sup>。

しかし、この教会建築や公の礼拝の許可は、ルター派の求めにより、1688 年 2 月 7 日に伯が、教会や学校の人事、公での sacrament や礼拝式の実行などを彼らに認めたことで危機に陥った<sup>48)</sup>。ルター派の宗教的自由拡大の試みに対し、改革派教会が反発したためである。フォルクは、これが改革派が、伯の寛容政策に批判的な態度を示した最初の例だと指摘している<sup>49)</sup>。この時期は政治的混乱によりフリードリヒ 3 世の政治的地位が危うくなっていたこともあ

---

43) Löhr, S. 34; Alfred Rüffler, Die evangelische Gemeinde, in: *300 Jahre Neumied*, S. 366.

44) S. Volk, S. 213; Reck, S. 232.

45) Reck, S. 232.

46) H. Volk., S. 13f.; S. Volk, S. 213; Reck, S. 213.

47) Scotti, S. 18–33; Schülter, S. 70–74.

48) Reck, S. 237; H. Volk., S. 83f.; S. Volk, S. 213f.

49) S. Volk, S. 214; Reck, S. 237.



り<sup>50)</sup>、1692年に伯は、1682年に与えた認可を撤回し、ルター派とカトリックの宗教的行為を再び私的なものに限定し、教会建設を禁じた<sup>51)</sup>。

ただし、ルター派とカトリックの宗教的自由の制限は、一時的なものにとどまった。ルター派の教会堂は、1684年から建設が始まり1691年に完成した<sup>52)</sup>。フリードリヒ3世は死去する直前の1698年2月27日に、カトリックに対し、数が増えた場合、教会や司祭館、学校、墓地を市内に建設し、礼拝式で鐘を鳴らすことなどを再認可した<sup>53)</sup>。ただし、共同体から任命された司祭と学校教師は、カトリックに反したり、良心の強制にならない限りは、ヴィート伯領の教会規則に従わねばならなかった<sup>54)</sup>。カトリックの教会堂は1704年に完成した。ただし、内陣、塔、鐘は設置されていなかった<sup>55)</sup>。市内で教会の塔や鐘を設置できたのは、改革派のみであった。塔や鐘は市内で公の宗教的行為が許されていることの象徴であり、改革派以外の宗派には認められなかった。

こうして、フリードリヒ3世の時代に、ノイヴィートにおいて、「法による宗派複数性」が確立されたと言える。

### 3. フリードリヒ・ヴィルヘルム治世での特権の拡張

#### 3.1 ヴェッツラー仮協定

フリードリヒ3世の死後、1706年にヴィート伯領の統治権を引き継いだの

---

50) 財政危機のためフリードリヒ3世が伯領を売却しようとしたことに対して、息子のゲオルク・ヘルマン (Georg Hermann) が1687年秋に皇帝から仮差し押さえ令を入手し、プファルツの顧問官にヴィート伯領の行政が委譲された。1693年にフリードリヒ3世が、息子フリードリヒ・ヴィルヘルムの後見人リッペ伯アウグスト (Graf August von Lippe) に伯領の支配権を譲り、1698年に伯が死去した後、ようやく仮差し押さえが撤廃された。そのためこの時期のフリードリヒ3世の支配権は法的には危ういものであった。S. Volk, S. 214–216.

51) S. Volk, S. 214; H. Volk, S. 14f.

52) Rüffler, S. 367; H. Volk, S. 83.

53) 条文は H. Volk, S. 55–57. 以下も参照, H. Volk, S. 18; Albert Meinhardt, Die katholische Kirche, in: *300 Jahre Neuwied*, S. 373; S. Volk, S. 215f.

54) S. Volk, S. 216.

55) H. Volk, S. 20; Meinhardt, Die katholische Kirche, S. 374.

は、彼の息子フリードリヒ・ヴィルヘルム (Friedrich Wilhelm; 1684–1737 年) であった<sup>56)</sup>。彼は伯になって間もない 1707 年 1 月 4 日に、ヴィート伯領全土で教会規則を公布した<sup>57)</sup>。

1707 年には 1694 年にフランス軍によって破壊された宮殿の再建が始まった。伯は、宮殿建築のための費用をノイヴィートや伯領への増税で賄おうとした。しかし、この増税は領民の反発を招き、1713 年には伯領の農民が森林使用権をめぐり帝室裁判所に訴訟を起こした。ノイヴィート市もまた、伯から都市の様々な特権を侵害されたとして、1717 年に帝室裁判所に提訴した。都市と伯の間の争いは、1721 年 4 月 10 日に結ばれたヴェッツラー仮協定 (Wetzlarer Punctation) で終わりを迎えた。この仮協定では、1662 年の特権が再確認され、君主と都市の間の収入の分配が新たに定められた。また、市当局は、ノイヴィートに新市民を受け入れる際の共同発言権を認められた<sup>58)</sup>。これにより、ノイヴィート市当局は、自治権を強めることができた。

### 3.2 ユダヤ人の地位<sup>59)</sup>

ヴェッツラー仮協定に基づく市民受け入れ時の市当局の共同発言権は、ユダヤ人のみ例外扱いになっていた。これ以降もユダヤ人受け入れの際の決定権は、専ら伯が保持した。これは、彼らの受け入れが、帝国諸侯に与えられたユダヤ人保護権に基づいていたためである<sup>60)</sup>。都市建設から間もない 1661 年には、

56) S. Volk, S. 217. フリードリヒ 3 世の死後直後にフリードリヒ・ヴィルヘルムがヴィート伯領の統治権を受け継がなかったのは、彼がまだ幼かったためである。1706 年まではリッペ伯アウグストが彼の後見人を務めていた。

57) 条文は Scotti, S. 41–50. 以下も参照。Schlüter, S. 74–77.

58) 条文は、Scotti, S. 70–84. 市民受け入れに関する条文は 26 条。仮協定が締結されるまでの争いと仮協定については以下も参照。Lützenkirchen, S. 119; Stupp, S. 45–49; Albert Meinhardt, *Der Werdegang Neuwieds*, in: *300 Jahre Neuwied*, S. 99–106.

59) Regnery, S. 53–62 を参照。

60) 条文は Scotti, S. 82. 以下も参照。S. Volk, S. 218. 国王から諸侯に与えられたレガールとしてのユダヤ人保護権については以下を参照。ハインリッヒ・ミッターイス＝リーベリッヒ著、世良晃志郎訳『ドイツ法制史概説 改訂版』創文社、1971 年、320–22、380 頁。

既にノイヴィート市内にユダヤ人が家建てており、1699年には10家族、1734年には19家族まで増えていた<sup>61)</sup>。ユダヤ教徒は、組織を作ることもなく、認可状を交付されることもなかった。あくまで個人としてヴィート伯から都市の居住や庇護を認められていた<sup>62)</sup>。

ユダヤ人は、伯の宮殿近くの「ユダヤ人通り Juden Gaß」に集まって居住していた。マインハルトによれば、ユダヤ人と市民の不和によって、1744年に伯は、市民にはユダヤ人に住居を賃貸しすること、ユダヤ人には「ユダヤ人区域 Juden Quartiers」の外に居住することを禁じた<sup>63)</sup>。

### 3.3 メノー派、ルター派、カトリックの特権拡張

フリードリヒ・ヴィルヘルム治世には、メノー派、ルター派、カトリックへの特権拡張が行われた。

1717年に伯は、新たに市内に移住してきたメノー派に対し、ツンフトへの加入を認めることを決定した<sup>64)</sup>。

ノイヴィートでは1681年に改革派が学校を作ると、他の宗派の子どももこの学校に通うことを義務づけられた<sup>65)</sup>。しかし、ルター派が1718年に自分たちの学校建設を願ひ出た結果、翌年改革派の教師に対する保証金支払いと引き換えに、伯によってルター派教師任命と学校建設が承認された<sup>66)</sup>。

カトリックは、認可状で伯から認められた学校や墓地の建設、内陣の建設を求めてきたが、改革派からの抗議・妨害もあり実現しなかった。そのため、彼らは1718年以降近隣の有力カトリック諸侯であるトリニア選帝侯に支援と皇

61) Albert Meinhardt, Die Jüdische Gemeinde, in: *300 Jahre Neunried*, S. 391.

62) Regnery, S. 54; S. Volk, S. 228.

63) Meinhardt, Die Jüdische Gemeinde, S. 392. マインハルトはこのユダヤ人区画をゲットーだと理解しているが、レグネリーは、命令によって強制されたゲットーではなく、自分たちの身を守るためにユダヤ人市民が自発的に集まって住んでできたものだと解釈している。Regnery, S. 55.

64) Kobe, S. 111.

65) Rüffler, S. 366f.

66) Löhr, S. 65; Reck, S. 248.

帝への取りなしを求めた。この苦情を受け、1724 年 9 月 23 日の手紙でトリエア選帝侯がこの件を皇帝に伝え、同年 12 月 18 日に皇帝が、市内のカトリックの権利を認めるよう訓戒する手紙を伯に送った<sup>67)</sup>。その結果、1725 年にはカトリックの教会に付属する墓地に信徒を埋葬することが認められた<sup>68)</sup>。

以上のように、フリードリヒ・ヴィルヘルムの時代にも、ルター派やカトリックの信徒が声を上げ、場合によっては市外諸勢力を巻き込むことで、非改革派信徒への宗教的自由の範囲が拡張された。

#### 4. フリードリヒ・アレクサンダー治世における宗教的寛容の進行

フリードリヒ・ヴィルヘルムが 1737 年に死去すると、その息子フリードリヒ・アレクサンダー (Friedrich Alexander; 1706–1791 年) がヴィート伯領の統治権を継承した。1737 年から 91 年まで続く彼の長い治世は、ノイヴィートの経済が向上し、人口が増加した繁栄期であった<sup>69)</sup>。

##### 4.1 靈感派に対する許可状

伯が代替わりして間もない 1739 年に、ノイヴィートに新たな宗教集団が加わるようになった。1739 年 1 月にツヴァイブリュッケン公国 (Herzogtum Zweibrücken) から追放された靈感派の 5 家族が、ノイヴィートへの移住を求めたのである<sup>70)</sup>。靈感派は、17 世紀末に現れた終末を预言するフランスの预言者の流れを汲むラディカルな敬虔主義者の一派である。その特徴は、聖霊に捉えられた人々が集団で恍惚状態に陥ることにあった。靈感派は、フランスからイギリス、オランダ、ドイツなどに移住し宣教を行った<sup>71)</sup>。

---

67) 両者の手紙は、H. Volk, S. 60–66. 以下も参照。H. Volk, S. 22f.

68) H. Volk, 23; S. Volk, S. 218f.; Reck, S. 249.

69) S. Volk, S. 220f.

70) Grossmann, S. 223; S. Volk, S. 221.

71) 靈感派については以下を参照。ハンス・シュナイダー著、芝田豊彦訳『ドイツにおけるラディカルな敬虔主義』関西大学出版部、2013 年、121–128 頁。

靈感派受け入れを求める手紙には、彼らがツヴァイブリュッケンの当局に対し行った信仰に関する 54 の回答が添付されていた。ヴィート伯領の宗務局は、靈感派の信仰に関する回答は神の言葉に誠実であり、ノイヴィートへの移住を阻害しないと判断した。そのため、ヴィート伯は、1 月 24 日靈感派にノイヴィートへの移住を認可し、ヴェッツラー仮協定に基づき市当局に受け入れを求めた。しかし、市当局は 3 月 12 日に、原則的には伯の寛容政策に賛成しながらも、靈感派が都市社会の一員になるかどうかについて疑念を抱いていると返答した<sup>72)</sup>。市当局は、これまでの経験から様々な宗派が市内にいることは、都市の繁栄を損なったり妨げたりしないことは分かっているが、他方で靈感派が市民社会に加わらないのではないかと懸念を表明した。そのため、靈感派にツunftへの加入を求めた<sup>73)</sup>。

伯はこれを受けて、1739 年 11 月 2 日に、11 条から成る認可状を作成した。この中で、靈感派も市民権から排除されないこと、他の市民と同じ負担を負うこと、彼らの中の手工業者はツunftへの加入が義務づけられること、宣誓や武器の携行はメノー派同様免除されること、良心の自由と私的礼拝、自分たちで結婚と埋葬を行うことが定められた<sup>74)</sup>。フォルクは、靈感派の受け入れではじめて市内の全宗教集団を都市共同体に統合することが問題となり、この決定では 17 世紀の特権とは異なり、教会法的規定ではなく民法上の問題が重要な位置を占めていると指摘している<sup>75)</sup>。認可状の民法に関わる項目は 1740 年 3 月市当局に、教会に関わる項目は 4 月に宗務局に渡された<sup>76)</sup>。ノイヴィートの文書で靈感派 (Inspirierten) は、分離主義者 (Separatisten) と呼ばれた<sup>77)</sup>。

1743 年に靈感派の数人が、キリスト教のいくつかの箇条は誤りであり、他の宗派の礼拝式を渾神的だと嘲ったという非難が上がった。しかし、書記局が

---

72) S. Volk, S. 221f.

73) S. Volk, S. 222.

74) S. Volk, S. 222f.; Grossmann, S. 225f.

75) S. Volk, S. 222f.

76) S. Volk, S. 222; Reck, S. 256.

77) Grossmann, S. 224.

彼らに訓戒を行った後は、そのような声は上がらなくなった<sup>78)</sup>。

靈感派を市民社会に統合しようとする市当局の態度は、靈感派の行進への参加をめぐる争いを引きおこした<sup>79)</sup>。伯の命令によってノイヴィート市民には、武器を持って行進を行う義務が課せられたため、1751 年 3 月 28 日に警備の訓練のための行進が行われた<sup>80)</sup>。靈感派は 5 月 28 日伯に対し、市民行進に参加しなかったため市当局によって所有物を没収されたので、市当局に働きかけこれらを返却させてほしいと請願した。この後、靈感派自身が武器を持たずに行進に参加するかどうか、行進への不参加を補償金で代替するかどうか、その額はいくらかをめぐり、伯や都市のシュルトハイス (Stadtschultheiß) も交えた交渉が行われた<sup>81)</sup>。1753 年にも市当局が靈感派に対し息子と共に行進に参加するか、さもなくば 5 ターラー支払うよう命じたが、伯は、通常の補償金の支払いを求めたに留まった<sup>82)</sup>。フォスによれば、これ以降は行進への参加をめぐる争いが起こることはなかった<sup>83)</sup>。

この行進をめぐる市当局、伯、靈感派の間の争いは、靈感派が行進という市民義務を果たすことでノイヴィートの市民社会に参加するか、そして市民としての負担を担うかどうかをめぐるものであった。その際、彼らの信仰そのものは問題とされなかった。市当局は、宗派の教えが市民社会の原理とぶつかった時に第一に市民であることを求めている。市当局のこのような傾向は、靈感派受け入れの時の彼らの態度と共通している。

---

78) Christian Hiskias Heinrich Fischer, *Deduction über die Religionsverhältnisse zu Neuwied*, FWA 65/10/16, § 144; S. Volk, S. 223.

79) この争いに関する史料は、ヴィート侯文書館の FWA 65/11/13 にまとめられている。事件の経過は、以下を参照。Fritz Voß, *Bürgerwehr in Neuwied von 1648 bis 1856*, Leipzig 1936, S. 38–41.

80) Voß, S. 28f.

81) シュルトハイスは、伯の代理人として都市の行政や下級裁判を監督する官職である。Stupp, S. 36f.; Meinhardt, *Der Werdegang Neuwieds*, S. 79ff.

82) Voß, S. 39–41; Grossmann, S. 226f.

83) Voß, S. 40f.

#### 4.2 ヘルンフート兄弟団に対する認可状

1750 年には、新たな宗教集団であるヘルンフート兄弟団 (Hernhuter Brüdergemeinde) の信徒がノイヴィートに移住してきた。ヘルンフート兄弟団は、15 世紀のチェコで生まれたボヘミア兄弟団に端を発する。彼らは 16 世紀には宗教改革を支持するようになるが、三十年戦争でプロテスタント貴族が敗北するとボヘミアやモラヴィアを追放された。彼らの一部はドイツの敬虔主義者ニコラウス・ルートヴィヒ・フォン・ツィンツェンドルフ伯 (Nikolaus Ludwig von Zinzendorf) の領地に受け入れられた。彼らはそこで敬虔主義の影響を受けたヘルンフート兄弟団を設立し、それ以外の場所にも勢力を広げていった<sup>84)</sup>。

ノイヴィートに移住したヘルンフート兄弟団の信徒は、イーゼンブルク＝ビューディンゲン伯領 (Isenburg-Büdingen) に住んでいた者たちであった。グスタフ・フリードリヒ伯 (Gustav Friedrich) がツィンツェンドルフ伯と仲違いした後、彼は 1750 年兄弟団に 3 年以内に移住するよう命令を下した。移住先を探していた彼らに、ヴィート伯がノイヴィートへの移住を持ちかけた。彼は 1750 年 8 月 6 日、ノイヴィートにヘルンフート兄弟団を設立する認可状を公布し、彼らに良心と教会上の自由を認めた。これにより 1750 年 10 月に、合計 42 人のヘルンフート兄弟団の信徒が説教師と共にノイヴィートに移住してきた<sup>85)</sup>。

ノイヴィートでのヘルンフート兄弟団の法的地位を確立させたのが、ツィンツェンドルフとフリードリヒ・アレクサンダーの交渉によって起草された

---

84) ヘルンフート兄弟団とツィンツェンドルフについては以下を参照。M. シュミット著、小林謙一訳『ドイツ敬虔主義』教文館、1992 年、156-184 頁；ヨハネス・ヴァルマン著、梅田與四男訳『ドイツ敬虔主義 宗教改革の再生を求めた人々』日本キリスト教団出版局、2012 年、189-213 頁；宮本憲「モラヴィア派とその海外宣教事業——近代プロテスタント宣教運動の起源に関する一考察——」『キリスト教論藻』41、2010 年、56-57 頁。

85) Ströhm, S. 52-57; S. Volk, S. 225.



1756 年 1 月 31 日の認可状である。この認可状は 33 箇条から成り、個人の信仰や良心の自由、市内に共同体の区画を作ること、自分たちの教会、墓地、学校を作ることが認められた<sup>86)</sup>。

この認可状が出されたことで、スイス、エルザス、ヘッセン、チューリングン、プファルツからも兄弟団の信徒が流入し、1758 年には 100 人、1783 年には 400 人に増加した。このように急速に信徒数が増えたため、1772 年にはそれまでの区画では足りなくなり、1781 年に兄弟団は周辺の区画を利用できるという認可が出された<sup>87)</sup>。

### 4.3 教会の建築

フリードリヒ・ヴィルヘルムの治世までは、市内で教会を建造することが許されていたのは、改革派、ルター派、カトリックという帝国で公認されていた三宗派に限られていた。しかし、フリードリヒ・アレクサンダーの治世では、この三宗派以外の宗教集団も、教会を建築することが許された。1748 年には伯から促され、ユダヤ人のシナゴグと学校が建設された<sup>88)</sup>。メノー派もまた、1766 から 68 年の間に伯や低地地方のメノー派の支援を受けて自分たちの教会を建設した<sup>89)</sup>。靈感派も自分たちの礼拝堂を建て、ヘルンフト兄弟団も 1785 年に教会堂を作った<sup>90)</sup>。カトリックの教会にも、1779 年に内陣と小塔、1786 年に鐘、1788 年にオルガンというそれまで禁じられてきた設備が伯の許可を受け設置された<sup>91)</sup>。

18 世紀半ば以降に宗教的マイノリティが教会堂を作り、カトリックの教会にそれまで改革派にしか許されていなかった塔と鐘が設置されたことは、彼ら

---

86) 条文は、Scotti, S. 166-170; Ströhm, S. 63; S. Volk, S. 226.

87) S. Volk, S. 227. ヘルンフト兄弟団の信徒数の増加については以下を参照、Ströhm, S. 73-83.

88) Regnery, S. 55.

89) Cattepoel, S. 147; 永本哲也 2019 年、197-198 頁。

90) Klaus Richter, *Neuwied am Rhein, gegründet 1653. Die Geschichte der Stadt im Spiegel ihrer Architektur*, Koblenz 2003, S. 15-17; Kobe, S. 117f.; S. Volk, S. 227.

91) Meinhardt, *Die katholische Kirche*, S. 374.

の宗教行為がかなりの程度公然と行えるようになったことを意味する。18世紀前半までとは異なり、それに対し改革派教会からの強い抗議は確認できない。ここから、18世紀後半には、改革派のみに公の宗教行為を認めるという、都市創建以来の基本原則が改革派教会にとってもかなりの程度重要性を失っていたと考えられる。

#### 4.4 伯による経済・人口政策

ヴィート伯が、宗教的マイノリティに対し一貫した法的保護を与えていたのは、ノイヴィートという都市の人口を増やし、経済的に発展させるためであった。フォルクは、ノイヴィートを建造したフリードリヒ3世は、ノイヴィート以外の伯領では改革派の信仰告白から逸れることを許さなかったのも、理念的に宗教的寛容を推し進めようとしたわけではなく、都市の人口を増やすための手段として寛容政策を行ったと指摘している<sup>92)</sup>。ただし、18世紀を生きたフリードリヒ・アレクサンダーについては、その寛容政策は都市の人口と収入を増やすことを第一の目的とした一方、啓蒙主義的な考えに基づき、宗教的寛容を促進した側面も認めている<sup>93)</sup>。

宗教的な自由を法的に認めることで、宗教的亡命者・少数派の移住を促そうというヴィート伯の政策によって、ノイヴィートの人口は増加していった。フリードリヒ3世が1662年の特権を公布してから人口は急速に増加し、1680年までに52、1690年に130、1700年には約200まで家屋数が増えた<sup>94)</sup>。フリードリヒ・アレクサンダー治世の1737から91年の間に、家屋数は約250から450に増加した<sup>95)</sup>。人口も1653年の450人から、1700年には1500人、1750年には3000人、1800年には4000人と増加し続けた<sup>96)</sup>。1771年の宗教集団別の人口比を見ると、改革派が44%、ルター派が20%、カトリックが16%、メノー派が

---

92) S. Volk, S. 217.

93) S. Volk, S. 231.

94) Meinhardt, Der Werdegang Neuwieds, S. 72–74; S. Volk, S. 210, 216.

95) Ströhm, S. 50.

96) Ströhm, S. 50.

3%、靈感派が 3.5%、ユダヤ人が 4.5%、ヘルンフォート兄弟団が 9% となっている<sup>97)</sup>。非改革派住民が 56% と過半数を占め、帝国で公認された三宗派以外の住民も 20% いたことを考えれば、ノイヴィートの人口増加にとって、宗教的自由を法的に承認することがいかに重要であったかが分かる。

## 5. ノイヴィートにおける宗派複数性

これまで 17～18 世紀におけるノイヴィートの複数宗派共存の実態を概観してきた。最後に、市内の宗派複数性を、法的側面、実践的側面から検証する。

### 5.1 法による宗派複数性

ノイヴィートは 1653 年の創建された当初から公認宗派である改革派以外の信徒も受け入れており、18 世紀後半には、改革派、ルター派、カトリック、メノー派、ユダヤ人、靈感派、ヘルンフォート兄弟団と 7 つの宗教集団が共存していた。市内で支配的地位を占める改革派以外の諸宗教集団の法的地位は、伯による特権・認可状の付与、保護の認定によって定められた。ノイヴィートでは、宗教的マイノリティであっても、居住や一定の信仰実践の自由が認められており、その範囲は次第に拡張された。市内での宗教に関わる規定は全てヴィート伯によって公布されたので、ノイヴィートにおける法による宗派複数性は伯によって築き上げられたと言える。

ただし、伯がメノー派に与えた特権は、帝国法に抵触していると承知しながら公布したものであった。つまり、メノー派は帝国と領邦では異なる法的地位にあり、彼らの法的保護はヴィート伯が帝国から彼らを守ることによってのみ成り立ち得た。

また、フランスでユグノーに対し一定の礼拝自由を認めたナント勅令が 1685 年に廃止されたように、宗教的マイノリティに付与された法的保護は取

---

97) Ströhm, S. 83.

り消されることがあった。しかし、ノイヴィートでは、改革派教会からの抗議により一時的にルター派やカトリックの一部特権を剥奪したことを除けば、ヴィート伯は一貫して宗教的マイノリティの特権を保護し続けた。その意味でもやはり、ヴィート伯の確固とした姿勢が、市内の宗教的マイノリティの法的基盤を支えていたと言える。

ただしこのことは、ノイヴィート市の市当局や各宗教集団が、伯の政策に従うだけの受動的立場を取っていたことを意味しない。確かに全ての認可状を公布したのはヴィート伯だったが、各宗教集団の市内での法的地位は、市当局や市内の各宗教集団、さらには皇帝や帝国最高法院、諸侯など市外諸勢力から出された要求や抗議、相互の交渉によってその都度変化した。その意味で、ノイヴィートにおける法による宗派複数性は、ヴィート伯、市当局、各宗教集団、市外諸勢力の間の交渉によって作られたという側面も無視できない<sup>98)</sup>。

## 5.2 実践的な宗教的寛容

ノイヴィートで、諸宗教集団の信徒同士がどのような関係にあったかは、これまでのところ十分に分かっているとはいいがたい。都市によっては、宗派によって文化や意識、家族・結婚相手が分かれるという「見えない境界」があったが<sup>99)</sup>、ノイヴィートでは宗派間の溝は深くなかったように思われる。

ノイヴィートでは宗派による空間的な区別は、余り進まなかった。シュトレームが作成した1771年と1779年の宗派別居住地の地図を見ると、ユダヤ人とヘルンフト兄弟団以外は、ほとんど宗派毎に固まることなく、入り交じっ

98) ウェイン・テ・ブレイクは、宗教改革後の諸宗派共存は、支配者、説教師や牧師などの文化的権威、臣民、外部の同盟または敵といった様々な勢力が織りなす政治的關係によって形成されたと指摘している。そのため、諸勢力の交渉が複数宗派共存で重要であったのは、ノイヴィートに限らなかったと考えられる。Wayne Te Brake, *Emblems of Coexistence in a Confessional World*, in: Dixon et. al. (eds.), *Living with Religious Diversity*, pp. 61-68.

99) 例えばアウクスブルクである。Etienne François, *Die unsichtbare Grenze. Protestanten und Katholiken in Augsburg 1648-1806*, Sigmaringen 1991.

て住んでいたことが分かる<sup>100)</sup>。ノイヴィートの市域は非常に狭いため、様々な宗教集団に属する住民同士が、必然的に日常的に顔を合わせていたことは確実である。

市当局には改革派以外にルター派やカトリックも参加していたことから、政治において複数宗派の信徒が協力していたことになる。所属する宗教集団に関係なく、成人男性は市民権を得ることができたとし、ツunftに参加することもできた。つまり、市民やツunftのメンバーとしての活動は、必然的に諸宗派の信徒が入り交じりながら行われたはずである。ヘルンフト兄弟団のダーフィット・レントゲン (David Roentgen) の家具工房とメノー派のペーター・キンツィンク (Peter Kinzing) の時計工房が頻繁に共同で仕事をしていたのはその一例である<sup>101)</sup>。ただし、異宗派婚や改宗の頻度、宗派によって文化やアイデンティティがどの程度異なっていたかはほとんど分かっていない。そのため、異宗派の信徒がどのような関係を持っていたかを、実証的に検証することが今後の重要な課題となる。

他方、市内では宗派間の争いも様々なかたちで起こっていた。その原因は、宗教的マイノリティに認められる宗教的自由の範囲をめぐるものであった。その際重要だったのが、公私の区分である。市内で教会、学校、墓地の建設、鐘の使用といった公の宗教行為が許されたのは、当初は改革派だけであり、それ以外の宗教集団は私的な宗教行為しか認められなかった。このような公私の区別は、ノイヴィートだけでなく、複数宗派が混在した場所では広く見られた。ベンジャミン・カプランによれば、近世に「公」と「私」が区別されるようになっていき、家のような私的領域での礼拝は、市民的・宗教的共同体の一体性を破壊しないというフィクションを人々が信じるふりをしたことによって、諸

---

100) Ströhm, S. 50.

101) Dietrich Fabian, *Kinzing und Roentgen, Uhren aus Neuwied. Uhren, Uhrenmöbel, Musikinstrumente, Spielwerke. Leben und Werk der Uhrmacherfamilien Kinzing und der Kunstschreiner Abraham und David Roentgen*, Bad Neustadt 1984; Cattepoel, S. 147; Troßbach, S. 234, 244f.

宗派が共存できたという<sup>102)</sup>。

しかし、宗教的マイノリティが、公で宗教実践を行う権利を要求することで、この「フィクション」が脅かされ争いが起こることは他都市でも見られた<sup>103)</sup>。ノイヴィートでも、少なくともルター派とカトリックは、私的な宗教的行為で満足していたわけではなく、能動的に自分たちの権利拡張を追求した。彼らの要求は、市当局や改革派教会からの反発を招き、市内で宗派間の争いが繰り返し起こった。

ただし、メノー派、ユダヤ人、靈感派、ヘルンフト兄弟団は、積極的に自分たちの宗教的権利の拡大を、伯や市当局に要求することはなかった。この違いは、帝国で公認され、市外では公認教会を作り、市外からの支援も見込めたルター派やカトリックと、どこにも公認教会を作ることができず弱い立場にあった他の宗教的マイノリティの相違に起因すると考えられる。

このように宗教的マイノリティが何らかの信仰に関わる要求を行った場合は、市内で宗派間の争いが起こる可能性があった。ただし、これらの争いは、伯が仲裁に入り、交渉に参加することで、市内の宗派複数性を深刻に脅かすことはなかった。

ノイヴィートの諸宗派間の関係は、17世紀から18世紀にかけて変化していたように思われる。その変化の一つは、宗派の違いよりも、市民としての一体性がより重視されるようになったことである。18世紀半ばに新しい宗教集団を受け入れる際に市当局が懸念していたのは、宗教的多様性が増加することではなく、市民的統合が脅かされることであった。この時代、ヨーロッパで次第に市民的平等と社会の世俗化が進んで行く中で、国家が徴兵義務を課すようになっていった。靈感派やメノー派のような宗教的な理由で武器を持つことを拒否する宗派が、世俗権力から政治的圧力を受けたのはノイヴィートだけではな

---

102) Kaplan, *Divided by Faith*, pp. 172–197; Benjamin J. Kaplan, Fiction of Privacy: House Chapels and the Spatial Accommodation of Religious Dissent in Early Modern Europe, in: *The American Historical Review* 107–4, 2002, pp. 1031–1064; 踊共二「宗派化論」242頁；安平弦司「宗派間関係と寛容の機能」5–6頁。

103) ユトレヒトの例は以下を参照。安平弦司「宗派間関係と寛容の機能」。

かった<sup>104)</sup>。このことは、宗教的な違いが社会的な重要性を失い、信仰にかかわらず市民は同等の権利を持つ代わりに、同様の負担を負わねばならないという考えが強まってきたことを示している。

また、18 世紀前半までは宗派間の争いの火種になった宗教的マイノリティの教会建設が、18 世紀半ば以降ヴィート伯主導で進められ、カトリックの教会堂に塔と鐘が設置された。このことは、複数宗派の共存にとって公私区分がかなりの程度重要性を失ったことを示しているとも解釈できる。これは、18 世紀後半に人々の宗派アイデンティティが変化したというフランソワの指摘が<sup>105)</sup>、ノイヴィートにも当てはまっていることを意味しているのかもしれない。18 世紀にはヨーロッパで啓蒙主義の影響で、次第に宗教的寛容の理念が広まった。そのような時代の雰囲気の中で、ノイヴィートの宗教的寛容も 18 世紀後半に啓蒙主義者から称賛されるようになった<sup>106)</sup>。市内の宗派間関係の変化が、宗教的寛容思想の浸透といかに呼応していたかを検証することも、今後の重要な課題となるであろう。

\* 本稿は、平成 29 年度上廣倫理財団の研究助成を受けて行われた研究成果の一部である。

---

104) メノー派は、ドイツ、ロシア、北米など各地で徴兵制に従わないことを理由に苦境に陥り、しばしば移住を行った。永本哲也他編『旅する教会』192-193、221-222、224 頁。

105) François 2007, S. 300f. ドリートガーも、ハンプルクでは 18 世紀にメノー派の間で他宗派への改宗、異宗派婚が増加していることから、この時代には宗派の違いが社会的な重要性を失いつつあったと指摘している。Driedger, pp. 167-171.

106) Kobe, S. 115ff.; S. Volk, S. 1, 230f.